

れたことが私の何よりの心のなぐさめになっておりました。

子供達がそれぞれ家庭を持ちまして二人きりになって今までは農業をして来ましたが時代とともに何時の間にか七十歳になってしまいましたので今は農業をやめました。今つくづく考えてみて背中寒くなる思いが先にたちます。

これから先何年生きられますか。自分を大切にしてい日でも長生して生きたいと思っています。いちいちのことは略させて頂きまして、これをよんでみて皆様の御感想におまかせします。

引揚げて来て共成に来てからも四十年になろうとしています。とつてもつらいことがたくさんありますが、今は思い出したくありません。とても一生の思い出はらくしても苦勞しても心の中はいつまでもはれません。

樺太から、八人の子を育てて

宮城県 渡 会 トヨメ

私は大正六年十月、西海岸真岡郡蘭泊村に生まれ、何不自由なく育てられました。十九歳で結婚しました。それから、昭和二十年までに、男二人女三人の子どもができました。終戦になり、蘭泊村は、日本に先に引き揚げることになりました。十五歳以上の男たちは皆残され、子どもは着たままで、あとの身のまわりの物は役場からチッキ小荷物の預かり証をもらい、大泊から送ってくれるとのことでした。七十歳になるお姑さんと三年生の子ども以下五人で終戦の翌日に出発させられました。私は生まれて初めての内地への旅立ちです。石炭を積む貨車で身を寄せ合って大泊まできました。そこには、連絡船を待つ大勢の人がいて、二昼夜も順番のくるのを待ちました。子どもたちは、疲れて倒れるし、ほんとうに生き地獄でした。お姑さんは当時七十歳、今から見れば年

よりでした。北海道に親戚がないので、お姑さんが若い頃お世話になったことのある音別を頼って行ったら、その頃は代がわりで、お姑さんの友達はおりません。私が見ず知らずの所へ、年よりと子ども五人を連れて行ったので、心細いかぎりでした。近所の物置を借りて、一か月ほど過ごしましたが、北海道の九月末は、朝晩は寒く、早く荷物がこないかと預かり証を持って、毎日駅に行き、駅員にたずねました。十日ほど通った頃、駅員が荷物は大泊港でソ連に押さえられた、と聞かされ、口増しに寒くなるうえ、この地で暮らすことはたいへんと思いい、お姑さんと相談して、宮城県のお姑さんの親戚を頼っていくことにしました。ところが、こちらは大勢の家族で、私たち七人がきたら驚かれ、それでも座敷を一室借りてお世話になりました。夫が樺太から帰るまでの二年ほど暮らしました。夫が帰ってきて、別の家の物置を借り、家族そろって暮らすようになりました。

それから間もなくお姑さんが亡くなり、子どもが三人ふえました。夫は北海道へ出稼ぎに行きましたが、仕事が終わる暇もなく、給料もきまって送ってこず、大家族を

養うことがむずかしく、育ち盛りの子どもたちにも苦労をさせました。中学を卒業した長男を毎日の食をのがれるだけでも良いと思ってお菓子屋へデッチ奉公に出し、次男は北海道へ、娘も卒業したので女中に出す等して助けてもらいました。娘が盆、正月の休みで帰ってくると米びつを見て「母さん米、麦あるの」と心配してくれるようになり、家計もいくらか楽になってきました。振り返って見ると、私は七十四歳、夫は五十五歳で早く亡くなり、今は長男夫婦が頑張っております。樺太から引揚げて、八人の子どもを手放すことなく育てました。

日本の敗戦と私の半生記

北海道 田畑喜一

ときに昭和八年二十七歳で樺太へ渡りました。積丹半島へ練が寄らなくなり樺太へ先行していた両親を支えるためです。更に祖父母の別居もあり、結婚適齢期である